

GCL NEWSLETTER 第 59 号 (2018.9)



◆ リーダーズインタビュー

政府 CIO 上席補佐官 兼 経済産業省 CIO 補佐官

平本 健二 氏

◆ 海外インターンシップ滞在記：

赤池美紀さん (D2) オーストラリア

◆ 第 1 回 GCL ランチミーティング (2018/09/25)



今回は、GCL広報のリーダーズインタビューの一環として、政府CIO上席補佐官で経済産業省CIO補佐官も兼務する平本健二氏にお話を伺いました。

★ご経歴について教えてください。

私は慶應義塾大学出身で、そこでは機械工学を勉強しました。大学院在籍時にフランスに交換研修に行き、今後は社会システムがとても重要であると感じ、NTTデータに入社しました。NTTデータでは、公共関連の部門に配属されたのですが、当時は、お客様の意見が少し位おかしいなと思って説得できなければ指示に従ってシステムを作るという文化がありました。そこで、よりクリエイティブな仕事をしたいと思い、社内公募で子会社のNTTデータ経営研究所というコンサルティング会社に出向しました。

コンサルティング会社で仕事をしているうちに、

社会横断の基盤整備にも興味を持ちました。また、新規事業も担当していたのですが、そのような新しい事業を行っていると、大手企業ではやりきれない部分が出てきて、そのような部分を行うために転職を考えるようになりました。本社に戻ってしばらくすると、通商産業省（現経済産業省）の情報処理振興課に出向することになり、そこでは教育の情報化を担当しました。教育の情報化とは、学校へのIT技術の導入や、ネットワーク時代の大学や生涯学習の在り方などを検討することです。また、未踏プロジェクトの立ち上げなど技術政策も担当していました。通商産業省には、2年ほど在籍し、その後NTTデータに戻りましたが、通商産業省のダイナミックでスピードの速い仕事を体験するうちに、NTTデ

ータの仕事がスローモーションに感じるようになりました。

そうした中、通商産業省を辞職した元課長がコンサルティング会社を作り、通商産業省に銀行から出向してきた人も参加し、技術担当として誘われたので、NTTデータを退職し、政策、金融、技術のスペシャリスト3人による強力なチームを実現しました。しかし、単にコンサルティングをするのではなくサービスまで実現するためには規模が必要なため300人の企業と合併をしました。私たち3名は社長以下、経営チームとして入り改革を進めるとともに、さらに4年後には、1000人規模の会社と合併しました。一部上場の企業から、ベンチャーに行き、JASDAQ、一部上場へと、数年間でジェットコースターのような遍歴です。

また、未来工学研究所にも出向し、安全保障政策に関する仕事をしていました。様々な安全保障の専門家と意見が交換でき、NTTデータというシステム屋での視点から、違う観点、広い世界から見ると違う視点があることに気が付きました。さらに、スタンフォード日本センターのeラーニングプロジェクトマネージャーとしてスタンフォード大学の職員を複業でやっていた時期もあります。アメリ

カの組織はマニュアルなどがとてもしっかりしており、ブランドイメージを守るということに力を入れていました。

仕事の幅も広いですが、一時は自分の会社も作ったので、零細から中小企業、大企業、官庁、大学、外資と様々な立場に関われたのが、その後の仕事で非常に糧になりました。

その後、通商産業省にいたご縁もあり、経済産業省からCIO補佐官制度の見直しなどをしに戻ってこないかと呼ばれ、経済産業省CIO補佐官になりました。その後、内閣官房で政府CIOの技術支援のトップであり副CIO格の政府CIO上席補佐官も兼務しています。

★政府CIO補佐官としての仕事

CIO補佐官になってからは、電子行政一筋です。私は政府CIO補佐官の中でもかなり特殊だといわれています。他の政府CIO補佐官の方は、民間から行政を経験せずに政府CIO補佐官になる人が多いですが、私は出向で政府の職員を経験しています。そのため、各省協議など行政にしかない特殊な仕事をこなすことができます。役人の





基本的なところと、技術的なところが両方行えるため、非常に重宝されますし、成果が出しやすいです。

例えば、他の人は技術的な説明が多く省庁の方に理解してもらえないことが良くあります。しかし、私は役所の経験があるため説得や交渉のツボもわかっており、非常に仕事がやりやすかったです。また、役所の職員で私のことを知っている方もかなりいらっしゃるの、信頼感をもって仕事を任せてくださいます。今担当している文字の標準化やデータの標準化のような政府全体のプラットフォームを作る仕事をすると、信頼してくれているということは、仕事にとっても有益に働いています。

基本的には、私自身も一国民ですので、どこから見てもおかしくない素の感覚を大切にしながら仕事をするのが大切だと思っています。

また待遇についてよく聞かれますが、民間より低いけれど役所の中ではそれなりに高い給与をいただくので、いただいた給料の中で成果を出していく、つまりは給与の3倍以上は必ず稼ぐということを常にこころがけています。また、政府CIO補佐官をする上で清廉潔白も重要な要素ですね。

—現在の主な仕事内容

最近はデジタル時代に合わせて、基盤から仕組みを変えていくという仕事をしています。例えば、氏名に関する仕事をしています。氏名のフリガナは、勝手に決めて名乗っているだけであり、戸籍にも住民票にも漢字の氏名しか記載されておりません。そのため、実際はどのように読んでも問題ありません。しかし、フリガナは日常的に使われており、今後100年後のこの国の姿を考えると、氏名のフリガナをきちんと登録できる社会基盤が必要だと考えています。また、グローバル化のため、フリガナのみならずローマ字についても対応をする必要があります。

氏名に限らず法人や土地などの社会の基本情報に関するプラットフォームを再整備すれば、新しいサービスが作りやすくなります。こうした大きな仕事は、民間では行うことはできませんが、行政にいと、頑張れば行うことができます。今、私は様々な仕事に関わることができるようになりましたが、これは最初に手掛けた文字(氏名漢字)の仕事が成功したからです。文字の仕事を最初に行ったときは、なぜそのような大変な仕事をやるのかという話が

ありましたが、強引に「やらせてください」とお願いしたところ、予算を確保してもらえました。それが実績となり、あいつは行政の痛いところをついてくる嫌な奴ではあるが、なんだかんだやるなという評価になりました。

—マーケティングの重要性

制度を作るにはかなりの力を使います。その制度を作るところに力を使い、予算を取ってきますが、その後は比較的丸投げにする人がいます。しかし、1億円の予算を使ったら、1億円の予算を3千万円の価値(効果)にするのか、1億円の予算を3億円の価値にするのかはとても重要なことであり、それは広報、マーケティングに全てかかっていると思います。

例えば、震災の後、各部門の人は「これだけの需要があるんです」、「この人たちを救うにはこれが必要です」といって予算を一生懸命取ったと思います。でも、自分のルートのみで予算や制度の案内をしているので、予算が余ってしまつてう制度が次々と出てきます。そこで、私たちはマーケティングという視点で復興のための支援制度を案内するデータベースを作りました。このように、制度を作るだけ



でなく、しっかりと必要な人にその制度を届けて使ってもらい、価値を生み出すということまで、私たちが行う必要があると思います。

—交渉に関して

私は交渉を行うときは、相手の方に「組織の立場を外れて話してください」と言っています。そうすると、「その仕組みは、やったほうがいいですよ」とか素で答えてくれる人が半分ぐらいおります。残りの半分ぐらいの人は最後までポジショントークでしか話をしてくれません。そのような方には理詰めで話をしますが、理詰めで話をするとやはり角が立ちます。しかし、「実際に生活していて困りませんか」と言う、「困ります」といいますよね。そうすると、組織と組織の会話ではなく、人と人の会話に持ち込むことができます。これはとても重要です。例えば、「100年後はどうでしょうか」という話をすると、「今できないけれど、100年後は違うかもしれません」と答えてくれます。「では、50年後はどうなんでしょうか」という話をすると「50年後も問題かな」というお話しになります。そうしたら、「我々の世代でなんとかしないではいけないのではないですか。ここで頑張りませんか」という流れで進めていくことができます。

若いころは、逃げ道がない議論をしてしまつて、理論のみで話をしてしまいました。そうすると、相手の感情が高まり、最後には人間関係も悪くなり、協力関係が築けなくなってしまいます。最後の逃げ道、相手の立場的な逃げ道に気づいてもらえるようにすることが重要で、それが私たちの仕事であると思っています。

また、海外や民間など世の中の流れの中で、どのような方向に進んでいるのかという話もします。例えば、デジタルトランスフォーメーションなど、デジタルによって抜本的に仕事に変化しています。従来のやり方が日本の社会を支えてきたことは認めますが、世界的な視点を持つと、今後、従来のやり方だけでは社会は成立しません。そのため、これまでと違い、他にこのような道があるのではないかとかいう話を行い続けます。そのような非常に地道なこ

とがとても重要です。そのためには、先ほど申し上げたマーケティングが重要で、マーケットにこれだけリーチすれば、あなたの効果はこれだけ出ますということを明確にして、相手の方が腑に落ちるようにしてあげます。

また、空き家がどのぐらいあるのかとかなど現地に行かないと分からないことがあります。そういうものを肌で感じて、政策を打っていく必要があると思っています。地方で会議等をして、なかなか率直に話してくれません。しかし、地元の人と飲み会に行って意見交換をすると（もちろん自腹で割り勘）、現場のアイデアやクレーム、問題意識を話してくれます。そうしたところで話を引き出すとともに仲良くなってきます。そういう情報ネットワークづくりが重要です。そうすると、ある地域で持っている意見と、他の地域で持っている意見との相違点が分かります。そうして集められた共通の課題こそ、私たちが国の政策として検討する必要があると考えています。

ーSNSの利用に関して

また、私たちはTwitterやFacebookを運用しています。他の省庁は広報のために行っていることが多いですが、私たちはそのためだけではなく、私たちのプロセスを開示するためSNSによる情報発信を行っています。

国民の方々から見ると、よくわからない審議会で、有識者の人が集まって政策を決めていると感じ、全く自分達の声が反映されないと思っているのではないのでしょうか。私たちは幅広く国民の声も聞きたいと思っており、SNSなどでつぶやいてもらえばいいと思っております。実は検索などをしてそういう意見もかなり見えています。

海外のニュースなども発信していますが、これは、私たちがこのようなものを見て政策を作っていますということを国民の皆様に分かってもらうために、行政プロセスを透明化するための一環としてやっています。

SNSだけでなく審議会や研究会をやるときに

も、賛成の意見の人やキーマンの方のみならず、私たちとは反対の意見を持つ方にも入ってもらっています。反対の方々も議論に参加していただくことで、議論が深まりますし、後から経緯も分からないまま批判をされることも少なくなります。

議論やプロセスを透明化して、その結果としてこの政策ができたという流れは、皆さんにとって納得感が高いと思っています。授業の中でもこれらの取り組みをオープンガバメントとして教えていますが、私たちの目指す政府、行政のあり方は、国民や事業者の方々との協働を通じて、皆さんが使いやすい政策を作ることです。そのために様々な人の声を聞かなくてはなりません。

★授業について

私たちは情報のバリューに、より着目しなくてはならないと思っています。情報は置いておくだけでは誰も見に来てくれません。的確にその人に届くかどうか、この情報のバリューを最大化するためには、それをどこに投げれば一番的確なのか、どういうふうに伝えればいいのか、その人たちが情報を使ってどういうふうに改善してほしいのかということなどを常に繰り返して考えていく必要があります。このようなマーケティングのテクノロジーを公共政策にきちんと入れていくことがとても重要だと思っていますし、それを授業では伝えたいです。一人一人が予算を確保したら、その予算の3倍の効果を必ずあげるのだという思いをもって実行すれば、国家財政として健全になるのではないのでしょうか。また、授業では情報とは何かということや、そのアーキテクチャも取り上げていきます。

政策担当者は、ただアンケートをとったり、コンサルティング会社にまともてもらうだけではなく、自分たちが足で稼いで、政策を作っていくということがとても重要です。そして、それを誰がやっても大丈夫なプロセスにしていくことが大切です。例えば、アイデアボックスという政策対話型のサイトでは、手順書をしっかりと作成し、私だけではなく、誰でも使用できるようにしています。そのような実際

の現場での取り組みなども紹介していきます。

今の私のチームの中に、公共政策大学院出身で私の授業をとっていた学生がいます。やはり彼は授業で学んだ理論だけではなく、社会の変化の中で、実践の中でどのように切り抜けていくのかということができています。情報をどう分析して、そしてセカンドオピニオンを聞いて、どのような意思決定をするのか、意思決定に対してどのようなフィードバックを得るのかというこの基本動作をどの学部でもやっていかななくてはいけないと感じています。

日本の大学でも、法学部と情報、経済学部と情報といった新しい学際的な領域が必要であると思っています。日本では学際についてあまり体系化されてないような気がしますが、だからこそ私たちが少し異なる観点から授業を行っています。そのあたりをしっかりと体系化できると面白くなってくると思いますし、みんなが首をかしげるようなコラボレーションがビッグマーケットを作っていけると思います。

私たちの授業が良く分からないことがあるということは反省しております。私たちは授業のための準備時間をあまり潤沢に持っているわけではないので、理論化されてません。そのため分かりにくくなってしまっているのだと思います。



大学の先生方の授業ほど体系化されておりませんが、アカデミックと産業界にはギャップ、距離感がありますので、例えば、法律はこのように解釈されこのように使われるという、実務に関する授業をすることはとても重要だと思います。

★GCL生に向けて

GCLという観点でいうと、グローバルな環境の中で日本もいいところ、悪いところの両面があります。その中で、私たちはより私たちのいいところを打ち出していき、世界とコラボレーションしようというスタンスで行動することが重要だと思っています。1億2千万人の国のマーケットを制覇したところでどうなのでしょう。全世界に対するマーケットの視点で取り組む必要があります。日本向けにまずやってそれで成功したら外に出て行きますという従来型のモデルではなく、最初の段階からグローバルを視野に入れたかたちでデザインをする必要があると思っています。

海外の視察ももっと課題意識をもって行うべきです。日本人は「自分たちがどのようにやっているのか」、「どのようなことが問題だと思うのか」といった意見を伝えずに視察に行くことが多く、先方は何を求めて視察に来るのか分からないので全体概要を説明して時間が終わってしまうというもったいないことが起こっています。私たちは、出張の際には、最初にプレゼンをやらせてもらい、私たちがなぜここに来たのかということ、背景について説明し、このような取り組みをしており、このような悩みを持っているという話をします。まずこちらが情報を提供することによって、相手からその情報に関する知見をもらうことができます。また、相手からも、この部分は教えていただきたいので一緒にやりましょうという次につながる話もすることができます。グローバルな世の中で必要なことを身に付けていくことが大切ですし、GCL生にも身に付けてもらいたいと思います。

(文責:荒川 清晟、写真:渋谷 遊野)

海外インターンシップ滞在記：赤池美紀さん（D2） オーストリア



2018年研究のためオーストリアのウィーンに滞在した博士課程2年の赤池美紀さんに、その様子を寄稿して頂きました。

ー自己紹介をお願いします。

学際情報学府 学際情報学専攻 文化・人間情報学コース博士課程2年に在籍している赤池美紀と申します。早いもので大学院生活も5年目に入りました。これまでの経歴についてはGCL NEWSLETTER 第51号(2018.1)でもドイツのベルリンへ滞在した話を寄稿させて頂きましたので、省略したいと思います。現在は、包括的で持続可能な音楽・健康・医学に関連するカリキュラムを構築し、世界中の学習希望者へ大学という枠を超えた教育を提供するための体制を運営することを最終ゴールとして研究を行なっています。

ーどちらに行かれましたか？

2018年4月～9月まで 6ヶ月間、オーストリアのウィーンへ滞在しました。芸術、カフェ、ケーキのザッハトルテや、豚肉を薄く伸ばして揚げ焼きしたシュニッツェルが有名な街です。使用言語はドイツ語ですが、標準的なドイツ語とはかなり異なるウィーンドイツ語が存在する場所だったことが、住み始めてから1ヶ月ほどで気づきました。書店では「ドイツ語辞書」ではなく「オーストリア語辞書」が売られています。たとえ標準ドイツ語と同じ単語や言い回しだったとしても、発音が標準語を話すドイツ人は非常に明瞭に発音するのに対して、特にウィーンはもごもごとくもった感じで発音します。これはベ

ルリンフィルとウィーンフィルの音色の違いに共通してみられる点でしたので、非常に興味深かったです。

ー具体的な動きがあった時から訪問まで、どのくらいの期間が必要でしたか？

準備期間は、3ヶ月程度でした。2017年10月から12月までベルリンの音楽大学の授業を現地観察していたのですが、ベルリン以外でヨーロッパではウィーンも非常に音楽・健康・医学に関連する授業が豊富に提供されているので、比較を行うために次はウィーンへ行きたいなと思っていました。最初にウィーンの先生へメールをしたのが2017年12月11日で、そこから数回メールをやりとりし、2018年2月13日にウィーンで会う約束を頂きました。2月に学会参加のためにスイス・ジュネーブに行くことが事前に決定したので、その日程に合わせてウィーン滞在を計画しました。当日は3時間近くもお時間をとって頂き、私の現在の研究や今後の計画について説明を行い、また先生が持っている様々な情報を頂戴しました。帰国後に研究の方向性について今一度検討したのち、改めて先生へ4月からウィーンに滞在したいことを伝え、最終的にThe University of Music and Performing Arts Vienna(ドイツ語はUniversität für Musik und darstellende Kunst Wien, 通称mdw)のMotion Emotion Labに、Visiting Researcherというポジションで半年間滞在する許可を得ることができました。

ー 現地の様子について教えて下さい。(研究室・発表・先生や他の学生との関わりなど)

博士課程の学生が一人いましたが、定期的に行われる研究室のミーティングはありませんでした。しかし毎月1回博士課程以上の学生や研究者を対象とした勉強会が開かれており、そこに参加していました。ちなみにこの時の使用言語はドイツ語でした。先生と個別で打ち合わせをしたいときは、事前にアポイントをとって行っていました。研究の相談をすると、必ずたっぷりと時間をとってくれる先生。

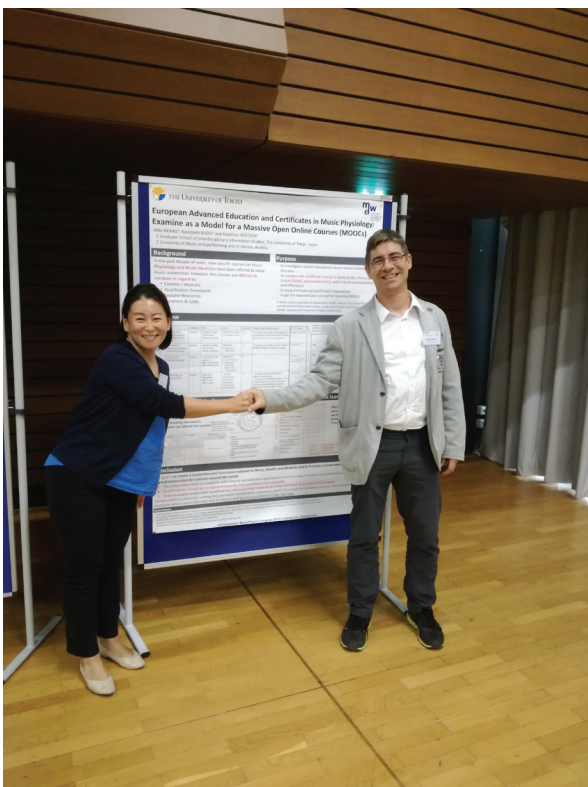


大学教室の窓から庭を眺めて

週の後半は大体自宅で仕事をしているということだったので「自宅でもいい?」と言われた時、とても久しぶりの感覚に新鮮さを感じました。というのも、私の音楽大学時代、大学の建物ではなく先生の自宅でレッスンを受けることは珍しいことではなかったからです。今回先生から「自宅でもいい?」と言われた時、あ～その感覚、音大だなあ。としみじみ思った瞬間でした。

ウィーンでの研究の成果として、2018年9月ドイツのオスナブリュックで開催されたコンGRESでポスター発表を行いました。このコンGRESでは私も会員となっている学会Deutsch Gesellschaft für Musikphysiologie und Musikermedizin (<https://dgfmm.org/>)の総会も同時に開催されました。この学会では主に音楽家を対象とした治療を行う医師、理学療法士、関連する身体系の資格保有者、研究者が会員になっていますが、私のように経営・教育・経済の観点から音楽・健康・医学教育の質やあるべき姿について議論する人はこれまでにいませんでした。しかしインターン先のウィーンの先生と共同研究を行って本当に良かったと思うことは、すでにこの学会でも名の知れた先生と一緒に研究発表を行うことで「ああ、あなたはBertsch先生のところのmikiね!」と私の存在をすんなりと受け入れて下さった点。経験の浅い者が海外やある特定の分野へ入りこむ手段の一つとして、既に地位が確立した先生との共同研究を行う方法があり、その環境の一つとしてインターンという枠組みを使うことのメリットを痛感しました。

昨年から様々な先生方へ研究に関連した質問をメ



インターン先の先生と共同研究した成果を学会でポスター発表したところ

ールでしたのですが、どの先生も面識がないなか非常に丁寧に答えて下さいました。この総会にはその先生方が多く参加されていたので、お礼を兼ねてご挨拶ができて嬉しかったです。またこの学会の事務の方にはこれまで何度か色々メールで事務手続き上のやり取りをしていたのですが、ついにお会いする機会に恵まれ、受付で「あ〜やっと会えた!ようこそドイツへ!!」と言いながら両手で大きく握手をして出迎えて下さったのが印象に残っています。

ーインパクトがあった思い出について教えてください。

＜ティッシュが素晴らしい件＞

こちらのティッシュは日本と比較するとかなり厚い。私はその厚さがとても気に入っています。夏のある日、洗濯(1回あたり3.6€/480円)を終え乾燥機から洗濯物を取り出す作業を行っていた時のこと。「あら素敵な白いレースの布切れ...でも私こんなもの持ってたっけ?...まさか服が破れた?」慌てて乾燥機の中を調べると、合計4枚の白いレース模様の布のようなものを発見。しばらくこれが一体何

なのか、それを引っ張ったり触ったりして考え込んだ。そしてレース模様の中にロゴが入っていたのでそれでやっと理解できたことは、これはティッシュペーパーだということ。おそらく洋服のどこかにティッシュが紛れており、洗濯と乾燥の過程で、4層から成る1枚のティッシュが分離した模様。しかも4枚の層どれもが、2時間も洗濯機と乾燥機の中でグルグルにされたにも関わらず、破れることなくふんわりと極上の仕上がりになっている!これはドイツ誇る家電メーカーMiele (<https://www.miele.de/>) が製造した洗濯 & 乾燥機の性能の高さを物語っているのか、あるいは元ドイツのティッシュメーカーで現在はスウェーデンのEssity社 (<https://www.essity.com/>) のTempo (<https://www.tempo-world.com>) の品質の高さを物語っているのか.....。Tempoのサイトをみたら、このような文言を発見。「アンナとベンはバスを待っている間に知り合い、彼女がTempo(ティッシュ)に電話番号を書いた。しかしベンはそれを忘れてズボンを洗濯してしまった。でも大丈夫。このTempoは洗濯することもできる!!ベン彼女の電話番号が書かれたTempoといつも一緒。」ティッシュって洗って再利用できるんだ。。日本のティッシュからは想像できない衝撃的事実。しばらくティッシュを眺めていた、とある1日の出来事でした。

＜サービスという概念の定義の違い＞

ネガティブな情報ですが、今年世界で最も住みやすい都市1位に選ばれたウィーンの一面もお伝えします。これまで多くの都市を訪問してきましたが、ウィーンの接客ほどひどいサービスはなかったです。これは特に“外国人”に対して強く現れる傾向があるようですが、同じウィーンで生まれ育った人でさえ、同様に感じているそうです。サービスは誰が誰に対して行うものなのか。顧客が従業員に対して行うのがウィーン式サービスだと半年住んだ私はそう理解しています。なお20年前にベルリンに住んだときはアジア人に対する差別をよく感じましたが、昨年ベルリンに再び住んだとき、かなり良くなっていることを感じました。しかしここウィーンは20年前のベルリン以下です。



洗濯されたティッシュ

＜多様な人種との出会い＞

研究をすること以外には、ドイツ語の語学学校にも通っていました。そこで出会った人の出身国を並べてみました。イギリス、オランダ、フランス、スペイン、スイス、イタリア、スロベニア、クロアチア、ボスニアヘルツェゴビナ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、トルコ、アルメニア、イラク、イラン、エジプト、パキスタン、モンゴル、中国、ブラジル...24カ国ありました。語学学校では文法や言い回しの表現を学ぶのですが、あるテーマに沿って互いにディスカッションする機会も多く、その国の教育や政治の情勢、価値観なども同時に知る機会に恵まれました。例えばドイツから4千km離れたカザフスタンではベルリンの壁崩壊について学校で学ばないけど、9千km離れた日本では学ぶ。それは何を意味するのか。イラクからきた彼はイランに対してなぜ敵対的な感情をもっているのか。オランダからきた彼はクイズを解くような感覚でドイツ語を学んでいた。なんでそんなに簡単に覚えられたり答えられたりできるのか聞いてみると「だってオランダ語はドイツ語に似ているから、語尾をちょっとドイツ風にしてみたら、あ不思議!できちゃった〜」ですって。絶対私には超えられない壁を感じた瞬間でした。

様々な都市を訪問したり、多様な人種と出会った



手書きした地図

りすることで、そもそもその国がどこにあるのかわからないことを痛感しました。そこである日パソコンの画面に紙を貼り、手書きでヨーロッパの地図を描いてみました。「ああ彼女はここから来たのか」「なんでこの国境線はこんなにも綺麗な直線なんだ?」「この地形は人が住めないよね。。」「そもそも地図を手書きで書くのは小学生以来じゃない?いや中学生だったかなあ。。」色んな思いを抱きながら静かな部屋で過ごしたとある1日でした。

ー インターン期間中に心がけたことについて教えてください。

ただウィーンに滞在するよりはその立地を活かし様々なEU諸国を訪問しようと事前に決めていたので、7カ国13都市を訪問しました。そのうち3カ国5都市は研究に関連したセミナーやカンファレンスに参加するためでしたが、それ以外は知らない土地を訪れ観光することで、見聞を広めることを目的としていました。そこで感じたのはドイツ語とスペイン語ができるとかなり旅が楽になるということでした。例えばスペインのマヨルカ島、チェコのブルノやプラハ、スロバキアのブラティスラバ、ベルギーのブリュッセルでは、英語よりドイツ語の方が現地の人を使い慣れていました。

ー 今後の予定を教えてください。

ウィーンの先生とは引き続き共同研究を行っていく予定です。具体的には8月中旬から共同でアンケ



自宅部屋から外を眺めて

ート調査を行っており、今後はその回収・分析・論文執筆という手順が待っています。それ以外にはオーストラリア（ウィーンがあるオーストリアではなく、カンガルーで有名な国）にある大学と、定期的なミーティングを持つ予定です。なぜならば私の研究に非常に似た活動を行っていることがオスナブリュックの学会期間中に判明し意気投合したからです。お互い何を知り、何に困っているのかをシェアしながら、共に研究を発展させていく予定です。なお似た研究を行なっているのはオーストラリアだけでなく、イギリスにもいらっしゃいました。7月下旬、修論のポスター発表をするためオーストリアのグラーツを訪れた際、ミュンスター大学に所属する博士課程の学生（女性）の研究が私の研究と似ていることが分かり、彼女と話をしました。その後もメールで私の悩みを相談したり、彼女が開催するワークショップの内容についてディスカッションしたりして、私の研究をどのように進めて行けば良いのかについて良い刺激を受け続けています。引き続き彼女と連絡を取り合っていく予定です。

ー最後に一言お願いします。

多様な人種との出会い、新しい経験、言語に対する新しい感覚（ティッシュを洗濯する）。普段使っている脳の部位とは違う場所が活性していることを何度感じました。これはきっと時間の経過に伴う経験の中で、最終的にこれはこういうことだったのかと自分の中で理解できる日が来るのだらうと思っています。

インターンという機会がなければ、これほどまでに多様な価値観や世界を俯瞰する機会は訪れなかったのではないかなと思うほど、刺激的で盛り多い半年でした。日本人として、一人の人間として、まだ卵だけれども研究者として、この地でこの場では何を発信すべきなのか。また相手の国の事情に配慮するためには、どのような発言が好ましいのか。多様な文化を持った人々との交流を通して、頻繁に考えさせられました。そして非常に重要なことは、訪れた地で現地の人から受け入れられるためには、現地の言葉話すこと。“外国人”として一定期間そこに滞在するだけであれば、確かに現地の言語は不要かもしれません。しかし私の場合、研究対象がドイツ語圏である以上、現地の人が話す言語や言い回し（表現）を使って、語る必要があります。それは決して日本語や英語を現地語に訳すことではなく、現地の表現を用いるということは、ある前置詞やその単語をなぜそのシーンで用いたのか、その文化的背景や微妙な相手の心理まで理解することができるようになります。新しい土地で研究を行う際は、定めた期間内にどこまでやるのかを事前に決めるとは思います。異文化理解や知らない世界を知るためには、その境界を薄めたり取り除いたりすることも時には必要かもしれないと感じました。これまでインターンを実施した方は、この点についてどのように考えるでしょうか。機会があれば他のGCLコース生と議論してみたいです。



←私の研究紹介サイト or <https://mikiakaike.wixsite.com/home>

第1回 GCL ランチミーティング（2018/09/25）



9月25日11:30-13:00に第1回GCLランチミーティング（懇談会）を開催しました。

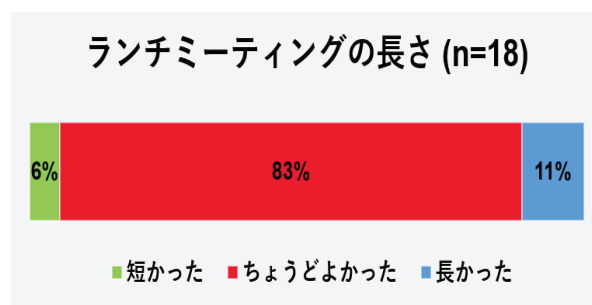
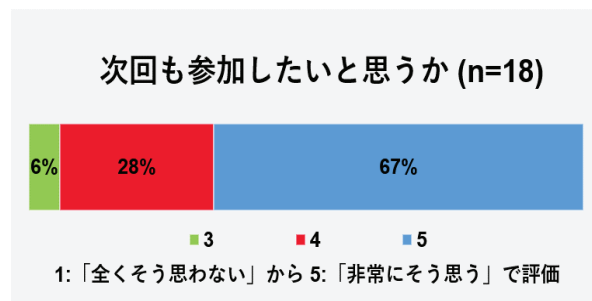
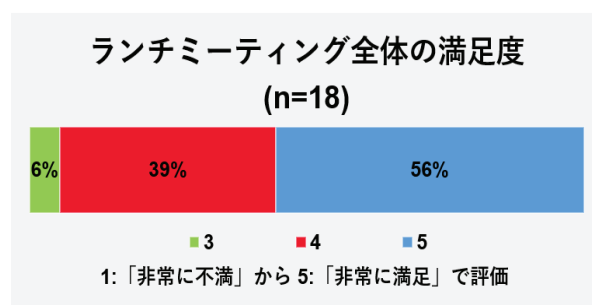
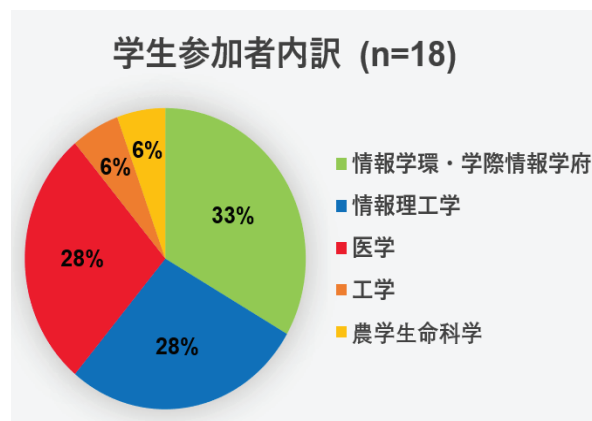
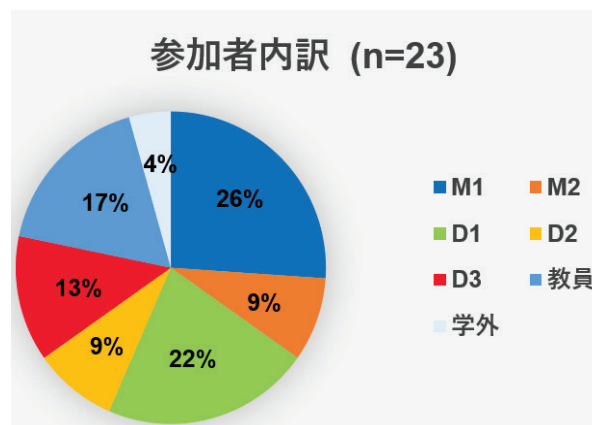
GCL学生自主企画「共創の促進－GCLラボのRe:Design－（代表：大野昂紀）」が主催で実施するGCLランチミーティングの目的は以下の2点です。

1. GCLコース生・プログラム担当の先生方との交流を活発にすること
2. 交流の中からコース生同士の共同研究がスタートすること

8月末に実施した第0回GCLコーヒープレイクは、直前のアナウンスとなったにもかかわらず9名の方に参加いただきました[1]。今回は、その時の振り返りを活かし、机を4人ずつのグループにするなど、参加者が少人数でそれぞれの興味のある分野、研究分野について深く話をすることができるよう工夫をしました。

ランチミーティングは以下のスケジュールで進み、弥生キャンパスのレストラン「アブルボア」のお弁当を食べながら、終始和やかなムードに包まれました。

- ・ 自主企画代表 大野昂紀よりランチミーティングの趣旨説明
- ・ 浅見先生よりごあいさつ・お話（「修士への進学率について」）
- ・ 歓談
- ・ 参加者より感想・コメント（塚田先生、山口先生、張さん）
- ・ 浅見先生より締めのごあいさつ・ATRの紹介



第0回同様、参加者に対してアンケートを送付し、感想の聞き取りをしました(23名に送付、有効回答数18件、回収率72%)。回答者の約半数がランチミーティングに非常に満足したと回答し(図:ランチミーティング全体の満足度)、およそ7割が「次回も参加したいか」という質問に対して「非常にそう思う」と回答したことから(図:次回も参加したいと思うか)、参加者それぞれが有意義な時間を過ごすことができたものと考えます。また、ランチミーティングの長さについて、今回は11時30分から13時までの1時間30分でしたが、回答者の8割が「ちょうどよかった」と回答しました(図:ランチミーティングの長さ)。

自由記載の感想では、「普段接点が少ない特任助教の先生とお話しできたり、浅見先生のお話を聞けてとても良い機会となりました。(D3学生)」、「他分野の方と話を出来るのは新鮮でしたし、楽しかったです。実際、初めて話してみても先生の印象も変わりました。(M2学生)」、「ランチミーティングのおかげで、留学以降1年以上会えなかった友人と再開することが出来ました。(D3学生)」といった感想がみられ、直接顔を合わせて話をする事の良さが存分に活かされた会であったといえます。

一方で、「4人ずつのテーブルはとても良かったですが、他の机の方とも話したかったです。(D1学生)」、「一回あたりで話せる人が限られている。特にゲストの先生と話せる人が少ないのはなんとか出来ないだろうか。(教員)」、「お昼の時間だけではまだまだ研究の話題までは至らなかった(M2学生)」といった、まだまだ会話・交流し足りないという意見もありました。ランチミーティングの中でも、参加者からマサチューセッツ工科大学の例を挙げて、卒業生も巻き込んだ交流の場として定期的なコーヒーブレイクの開催が提案されました。大学における継続したカジュアルな交流の重要性は既に認識されており[2]、東京大学でも、カブリ数物連携宇宙研究機構では毎日午後3時から全員参加のティータイムがあり、そこから研究に発展したという事例があります[3]。



ということで、自主企画「共創の促進ーGCLラボのRe:Designー」では、月1回のランチミーティングに加え、毎週コーヒブレイクを開催することとしました!!10月は毎週火曜日の午後1時からおよそ1時間開催します(23日、30日に開催です)。予約不要、コーヒーとお菓子を用意してお待ちしておりますので、奮ってご参加ください。

10月のコーヒブレイク・ディナーミーティング
10月は毎週火曜にコーヒブレイクを開催、月末金曜日にディナーミーティングを開催します。
・コーヒブレイク(毎週火曜日13:00～): 23日、30日
・ディナーミーティング: 26日(金) 20:30～
ディナーミーティングはGCL講義VII The官僚の懇親会との共催です。ぜひ18:45～のThe 官僚からご参加ください。

謝辞

お忙しい中ご参加いただきました株式会社国際電気通信基礎技術研究所 代表取締役社長 浅見徹さま、GCLプログラム担当の先生方、学生みなさまに心より御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 荒川清晟, 野寄修平, 松本啓吾. “GCL コーヒブレイク(2018/8/24),” GCL NEWSLETTER. 2018;58:10-12. (URL: https://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2018/09/2018-08_no-58.pdf)
- [2] 米国の大学におけるイノベーション促進等のための施設整備に関する実態調査団. “米国の大学におけるイノベーション促進等のための施設整備に関する実態調査 報告,” 今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議(第6回) 資料. 2015. (URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/031/shiryo/_icsFiles/afildfile/2015/03/09/1355657_07.pdf)
- [3] 東京大学Webサイト Features. “宇宙を研究するための空間 グローバルな研究所を目指して,” 2018-09-25閲覧. (URL: https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/f_00062.html)

(文責: 大野 昂紀、野寄 修平、写真: 荒川 清晟)

<編集・発行>情報理工学系研究科・GCL 広報企画チーム

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 6 2 1 号室 GCL 事務局内

E-mail: pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp

<発行責任者>谷川智洋（特任准教授）

< GCL 広報企画チームメンバー>渋谷遊野（学際情報学府 D3）、赤池美紀（学際情報学府 D2）、山田文香（情報理工 D2）、荒川清晟（学際情報学府 D1）、松本啓吾（情報理工 D1）、蛭谷夏海（農学生命科学 M1）、大野昂紀（公共健康医学 M1）、五嶋佐和子（教育学研究科 M1）